

忘れられない自然の恐ろしさ

出石中学校二年 森 都紀子

「堤防決壊の恐れ。避難して下さい。」という防災無線の声。私はまず床に置いていられるのはすばて上に上げて、大切なものは押し入れの中に入れてました。時間がない中急がないとという気持ちだけで動いていました。準備もでき、私は避難する車の中から大雨が降るのを眺め、お願いだから堤防はきれないで、せめて床下浸水ぐらいでと私は祈ることしかできませんでした。そして午後十一時ぐらいだったと思います。防災無線から「鳥居橋近くの堤防決壊」と連絡が入りました。私は驚きを隠せませんでした。

朝、外に出て見た光景が、私は信じられませんでした。電柱の三分の二は水につかっています、私の家は屋根しか見えていません。どうしてこんなことになった。たんだろ。私たちの大切なものがいっぱい詰まった家なのに今はもうなにもなくなっていました。

と泣きたい気持ちでいっぱいでした。悲しく  
 て悲しくてしかたがなかつたです。  
 それから二、三日たつて私と妹は三重県の  
 実家に行つたり、帰つてきてゴミの分別をし  
 たりしました。心が痛みました。又しばらくは  
 学校へ行つて私はみんなが応援してくれてる  
 んだから落ち込んではいけないでこれからの生活を  
 頑張つていこうと思ひました。そして応援し  
 てくれたり、助けてくれたみんなに「ありがとう」  
 という感謝の気持ちでいっぱいでした。

この台風二十三号で強く思つたことは、自  
 然とは恐ろしいものだということでした。い  
 つ何が起ころかわからない自然の中で生きて  
 いる私たちだからこそ、一体何をすべきか考  
 えなければいけないと思ひました。もう二度  
 とこんなことは起ころてほしくないです。も  
 うこんなことで苦しむたくないです。だから  
 私の心にはこの水害というものがいつまでも  
 残つていると思ひます。私たちは決してこの  
 水害を忘れることはないだろう。